



世界の農業・農政

アルゼンチンの農業の現状と課題 —我が国の食料輸入先国多角化の視点から—

国際領域 上席主任研究官 田澤 裕之

1. はじめに

アルゼンチン共和国（以下「アルゼンチン」）は、南米大陸の最南端大西洋岸に位置し、パンパと呼ばれる大平原を中心とした豊かな国土で農畜産業が発展した世界有数の農畜産物産出国の一つです。農業部門が国内総生産（GDP）に占める割合は2000年の4.7%から2021年には9.7%と2000年代に入り倍増し、輸出面でも穀物（小麦、とうもろこし等）、油糧種子（大豆等）、牛肉等の農畜産物とその加工品の輸出大国です。日本から地球のほぼ反対側に位置し、遠い国と見られがちなアルゼンチンですが、本稿では「食料供給を担う世界有数の農畜産物輸出大国」という観点から、同国の農業の現況を紹介したうえで、我が国の食料輸入先国多角化の視点から今後の課題などについて述べます。

2. 農業はアルゼンチン最大の輸出産業

アルゼンチンは、小麦（第1表）、とうもろこし（第2表）、大豆（第3表）、大豆油・大豆粕（第4表）等の穀物生産、油糧種子生産及び加工のいわばオールラウンダーな国です。これら品目の生産量に占める輸出量の割合も比較的高く、2020年の同国全輸出額に占める農産物（穀物、油糧種子・加工品、その他農畜林水産加工品）の割合は67%に上り、農業は同国最大の外貨獲得産業となっています。大豆に関しては、大豆そのものよりも加工品（大豆油・大豆粕）の輸出を政策的に促進しています。

穀物等の主な輸出先国として、小麦は隣国ブラジルとインドネシア、大豆はほぼ中国が占めています。

第1表 世界の小麦の生産量・輸出量（2020年）

No.	国	生産量 (百万t)	No.	国	輸出量 (百万t)	輸出量/生産量 (%)
1	中国	134.2	1	ロシア	37.2	43.4
2	インド	107.5	2	米国	26.1	52.6
3	ロシア	85.8	3	カナダ	26.1	74.4
4	米国	49.6	4	フランス	19.7	65.4
5	カナダ	35.1	5	ウクライナ	18.0	72.3
11	アルゼンチン	19.7	7	アルゼンチン	10.1	51.3

第3表 世界の大豆の生産量・輸出量（2020年）

No.	国	生産量 (百万t)	No.	国	輸出量 (百万t)	輸出量/生産量 (%)
1	ブラジル	121.7	1	ブラジル	82.9	68.1
2	米国	112.5	2	米国	64.5	57.3
3	アルゼンチン	48.7	3	パラグアイ	6.6	60.0
4	中国	19.6	4	アルゼンチン	6.3	12.9
5	インド	11.2	5	カナダ	4.4	69.8

資料：FAOSTATから筆者作成。

とうもろこしの輸出先はアルジェリア、エジプトやベトナムが主ですが、日本へも輸出されています。

3. アルゼンチンと我が国の関わり

我が国の2021年の輸入先国内訳（主要5穀物等（小麦、とうもろこし、大豆、ソルガム、大麦及びはだか麦）の総計輸入量比）は、米国、ブラジル、オーストラリア、カナダの常連4か国で92%、アルゼンチンが約5%、その他の国が約3%で、この年、アルゼンチンは第5位となっています（第1図）。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）や異常気象等によって混乱した2021年には、前年と比べて我が国の食料調達国としてのアルゼンチンの存在感が大きく増しました。理由として、ブラジルが干ばつによる不作年で日本向けのとうもろこし輸出量を絞ったため、その代替として日本向けアルゼンチン産とうもろこしの輸入量が増大したことがあります（日本のアルゼンチン産とうもろこし平均輸入量（2001～2020年）の2.5倍増）。また、アルゼンチンから日本へはソルガムも継続的に輸出されています。

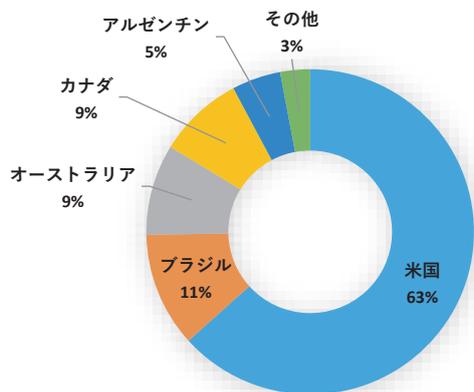
このようにアルゼンチンが加わることにより、米国、ブラジル、オーストラリア、カナダに次ぐ形で、我が国の食料調達先の多様化が図られます。また同国は中南米で日系移住者人口がブラジル、ペルーに次いで三番目に多い国でもあります。こうした絆を大切にしつつ、両国の交流・交易の一層の促進を図っていくことは、それ自体重要なことであり、我が国の農産物輸入に係るリスクの分散の観点からも有意義といえます。

第2表 世界のとうもろこしの生産量・輸出量（2020年）

No.	国	生産量 (百万t)	No.	国	輸出量 (百万t)	輸出量/生産量 (%)
1	米国	360.2	1	米国	51.8	14.4
2	中国	260.6	2	アルゼンチン	36.8	63.1
3	ブラジル	103.9	3	ブラジル	34.4	33.1
4	アルゼンチン	58.3	4	ウクライナ	27.9	92.4
5	ウクライナ	30.2	5	ルーマニア	5.6	51.4

第4表 世界の大豆油・大豆粕の輸出量（2020年）（単位：百万t）

大豆油			大豆粕		
No.	国	輸出量	No.	国	輸出量
1	アルゼンチン	5.2	1	アルゼンチン	22.2
2	米国	1.2	2	ブラジル	16.9
3	ブラジル	1.1	3	米国	10.0
4	パラグアイ	0.6	4	オランダ	3.2
5	オランダ	0.6	5	パラグアイ	2.0



第1図 2021年日本の輸入先国内訳 (主要穀物・油糧種子 (小麦、とうもろこし、大豆、ソルガム、大麦及びはだか麦) の合計輸入量比))
資料：財務省「貿易統計」から筆者作成

4. アルゼンチン農業の課題

近年、ラニーニャ現象を背景とする異常気象の頻発 (アルゼンチンやブラジルでは、高温・乾燥による干ばつの穀物等生産への影響が懸念)、さらにCOVID-19や2022年2月のロシアによるウクライナへの軍事侵攻が食料不足や価格高騰などを引き起こしています。それらを受け、同年6月時点で世界20か国以上の食料輸出国が自国での食料不足や価格高騰を防ぐための輸出規制を実施しています⁽¹⁾。

アルゼンチンでも2021年12月、2021/2022年産の小麦・とうもろこしを対象として、国内価格や供給量を考慮した輸出総枠規制を設定しました。同国は、従来から、財源確保のため高率の穀物輸出税を課すほか、穀物の輸出監視強化のため情報登録措置を導入するなど、農産品輸出を政府の強いコントロール下に置こうとする傾向があります。そのため政府と農業関連団体は常に強い緊張関係にあり、団体側はストライキや穀物出し渋り等で政府に対抗、しばしば混乱が生じています。また、経済全般でも2022年6月、インフレ率が年率60%超となり過去30年間の最高を更新する一方、IMFとの債務調整が並行して図られるなど厳しい状況に置かれています。

このようなアルゼンチンの一連の政策は、食料輸出国である同国の輸出競争力を低下させることになりかねません。同国には、経済・財政再編を図りつつ、しばしば輸出規制を行う不安定な国という印象を与えない政策を進め、輸出相手国との信頼関係を積み重ねていくことが求められます。

5. 新興国グループとアルゼンチン

BRICSは、ブラジル、ロシア、インド、中国、南アフリカ共和国の新興5か国で構成されるグループであり、2022年2月のロシアによるウクライナ侵攻後、BRICS内での貿易が活発化していると指摘されています⁽²⁾。アルゼンチンは、こうした状況下、イランとともに2022年6月にBRICSへの加盟申請を行っています (第2図)。アルゼンチンは、これに



第2図 地域統合模式図 (アルゼンチン及び関連国)

※1 BRICS 新興5か国の総称 (赤枠)。
※2 メルコスール (Mercosur) 南米南部共同市場 (青枠)。

先立つ2022年2月に中国の「一帯一路」構想への参加を表明しており、最近、これら新興諸国との連携を強化する動きが目立ってきています。BRICSのメンバー国と我が国とは、ロシアのウクライナ侵攻などをめぐって国際社会における立場の違いが少なからずあり、今後アルゼンチンが正式にBRICSに加盟した場合、ブラジルなど既存の加盟国との関係とも共通しますが、我が国が食料供給元として関係を構築していく上で影響が出てくる可能性もあります。

当所の「2031年における世界の食料需給見通し」においては、中南米の主要輸出作物であるとうもろこしや大豆の輸出量は、引き続き増加する見込みとされています⁽³⁾。我が国の将来的な食料供給確保の観点から、南米諸国との連携の重要性はより高まると考えられますが、アルゼンチンの穀物輸出規制等の政策やBRICS・中国への接近が今後どのような動きを見せるか、注視していく必要もありそうです。

6. おわりに

食料安全保障を考えるうえで実施すべき施策は、第一に国内での食料自給率の向上があります (2021年度で38%)。具体的には、農地・水や担い手を中心とした農業経営体の確保、スマート農業など農業技術水準の向上等を通じた食料供給力の確保・向上が必要です。第二が食料供給不足時に備えた適切、効率的な食料備蓄の運用です。第三に外国からの安定的な食料供給があげられます。

食料自給率を裏返せば、我が国食料の62%は外国に依存している事実から、主要輸入先国との良好な貿易関係形成による安定的な食料輸入の確保は、自給率向上と並行して進めるべき当面の課題です。その意味で、我が国の常連食料輸入先4か国に次ぐ位置を占めるアルゼンチンは、考慮すべきリスクも少なからずあるとはいえ、我が国が食料輸入先国の多角化を促進する戦略的パートナーとなりうる潜在性を有しています。食料をはじめとする物価高騰で多くの人々が将来の食料供給に不安を感じる今日、本稿が、遠い国と思われがちなアルゼンチンの農業・農政と、我が国の食料安全保障について考えていただくきっかけになれば幸いです。

【引用・参考文献】

- (1) IFPRI (Apr. 2022), Documentation for Food and Fertilizers Export Restriction Tracker
- (2) IHS Markit (Jul. 2022), Global Trade Atlas
- (3) <http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyuu.html>